



片倉もとこ記念沙漠文化財団 ニューズレター

2014. 11 No.1



● もくじ

P 1	巻頭言	牛木久雄
P 2	片倉もとこ と「ゆとろぎ」の世界	河田尚子
P 3	沙漠へ、、、	吹田靖子
P 4-5	設立披露パーティー報告	郡司みさお
P 5-6	ゆとろぎ賞受賞者のことば «ゆとろぎ»の気持ちでこれからも	長濱直・長濱晴子
P 7	新聞記事紹介 アブドゥルラヒーム・アル・アフマディ	片倉邦雄訳
P 8	「片倉もとこをフィールドワークする」報告	河田尚子
	活動報告	

● 巻頭言 片倉もとこ記念沙漠文化財団ニューズレター配信にあたって

この度、当財団ではニューズレターを皆様に配信して、情報発信を一層充実させることに致しました。

当財団は、昨年 11 月に一般財団法人として発足し、去る 2 月、片倉もとの旅立ち 1 年を前に、財団お披露目を済ませることが出来ましたが、お披露目にお集まり頂いた多くの方々や、当財団発足に際して力強いご支援を頂いた方々と、このニューズレターを介して、今後も引き続き繋がりを確かなものとさせて頂きたく思っております。

また、これまでに築かれた当財団のネットワークを、このニューズレターの配信によって更に拡大し強固なものとすることも意図しております。ニューズレターを受け取られる皆様には、この面でのご理解とご協力もお願いする次第です。

当財団の事業内容は、「沙漠のままの文化を大切にしたい」という、片倉もとの視点に常に回帰しながら展開させねばなりません。多岐にわたる事業内容を実体のあるものに育てるためにも、皆様からのご意見、ご提案が重要です。即ち、このニューズレターの双方向性が、大変必要だと考えております。

しかしながら、このニューズレターの通信媒体としての雰囲気は、理屈抜きの、ゆとりとくつろぎをもって、お読みいただける、あくまでも「ゆとろぎ」に基づくものでなければなりません。当財団の通信媒体として、この面での特徴を誌面に培ってゆこうと思います。

発足後、当財団は未だ模索しつつ活動を進めております。皆様のご協力をお願いする次第です。

「さあ、お昼寝しましょう！」 号令一下、ソファや絨毯の上に、アジア各国からやってきたムスリマたちがごろごろと横たわる。数年前、オーストラリアのシドニーで、イスラームとキリスト教の宗教対話会議に出席した時のこと。会議が終わり、主催者の一人、オーストラリアに移住してきたエジプト人ムスリマの広い御自宅に招かれたときのことだった。

ああ、やっぱり、そうなんだなあ。『イスラームの日常世界』の、「ラーハ」(ゆとろぎ)についての説明の中に、「沙漠に暮らす人たちをたずねて行って、やっとゆきついたとたん、ごろんとねっころがっても、みんなにここにこしている」「日本では、親のうちでもそうはいかない」という描写がある。しかし、まだまだ日本的な常識にしばられていた私は、それはあくまでも、もともと先生が調査地の人たちに十分受け入れられているからこそできるんじゃないのかしら、と思っていた。しかし、沙漠ならぬ、シドニー郊外の緑豊かな町中でも、初対面の、国籍も民族も違う女性たちが、ごく普通に「ごろんとねっころがって」いる。私も、パプアニューギニアから来た、もとキリスト教徒の女性と一緒に、ふかふかの絨毯の上に寝転がった。彼女は額に十字架の刺青を入れていて、「これはクリスチャンだった時に入れたもので、消すこともできるんだけど、もとはクリスチャンだったということをわかってもらうために残しているの」というような話をしてくれた。すぐそばでは早速いびきをかいている人もいる。ひと眠りした後はみんなすっかり会議の疲れもとれ、あらためてうちとけることができたのだった。



アラビアカーヒーをいれる片倉もともと

生産的活動と非生産的活動が区別され、生活が二分化される欧米の文化とも、労働にも遊びにも真剣に取り組み、遊びが仕事の延長ともなる日本の文化とも違う。労働をあまり熱心にやりすぎると命にもかかわるような過酷な乾燥地帯の自然条件のもとで、仕事も遊びも重要ではない、「ラーハ」というものこそ大事なのだというイスラーム世界独特の価値観。しいてい

ば「休息」や「安息」だが、日本語には訳しにくい「ラーハ」の概念を、抽象的な議論や、学者仲間にしかわからないような難解な文章でなく、誰にでもわかる平易な言葉で語る。日常生活の何気ない出来事を有機的に結びつけ、パズルのピースのようにはめこんで、具体的な事例をたくさんあげて明らかにしてみせる。それに「ゆとり」+「くつろぎ」-「りくつ」=「ゆとろぎ」という、ほほえましく覚えやすい名前をつけてしまう。それが片倉もともとという文化人類学者の、なかなか真似のできないスタイルだった。

そこには、すべてのものを一つに化するというイスラームの根本思想「タウヒード」に関する深い考察もある。しかし、それが強調されすぎることではない。読者の心に残るのはむしろ、涼しい夜の沙漠に舞い踊る乙女たち、香りをたきしめてお客を迎えるおもてなしの優雅さ。日本ならば「非効率」などと切り捨てられてしまうような、瞑想にふけったり、ぼんやりしたりする行為の大切さ、などのエピソードだ。私のオーストラリアでのお昼寝体験も、「ゆとろぎ」のことを知らなかったら何ということもなく見過ごしてしまっただろう。



お香の香りに包まれて、ゆっくりと朝食をとる

今、沙漠に住む人々の生活は大きく変化し、『アラビア・ノート』の調査地ワーディ・ファーティマも、すっかり様変わりしているようだ。しかし、人々が沙漠の自然のもとでつちかってきた文化や価値観は容易には変わらない。過酷な自然状況も、いくら開発が進んでも簡単には変わらないだろう。片倉もともとが見出した「ゆとろぎの世界」は、沙漠や乾燥地帯に住む人々の中に生き続けていくに違いない。またそれは、近代化が極端に進み、非人間的なまでの効率重視の社会の中で窒息しかかっている日本人にとっても、たいへん参考になる価値観ではないだろうか。

(文： 河田尚子)

沙漠を愛して逝った片倉もとこさんとは、津田塾大学の同級生だった。「湘南高校から津田にいった新谷素子というのがいるよ。奈良の小・中学校でいっしょだったが、才色兼備とはああいうのを言うんだ。」入学前に、高校時代の友人からこんなうわさを聞いていた。

彼女といつ話すようになってのかまったく思い出せない。しかし折りにふれての写真が残っている。その一枚は、四年生の初夏にアメリカ留学が決まった彼女をかこんだもの。「正田美智子」さまみたい…とまぶしくみつめたものだ。



1959年 津田塾大学寮の前で

留学から戻った彼女が津田を卒業した時、わたしは広告会社で働く社会人だった。まだ新幹線の走っていない大阪駅のホームで逢った。「わたしはいまアラビア語を辞書を食べながら勉強している。エジプトのカイロ大学に留学するの。あなたこれからはアラブの時代よ。明日をみつめる彼らの視線は強い、確かだわ。」と言って列車に乗りこんだ。

次に逢ったとき、彼女はエジプトで結婚して母になっていた。外交官夫人として、母として、更に英語教師として働く一方で、大学院の学生になろうとしていた。日曜日、桜上水の外務省アパートを訪ねると、中東を学ぶ仲間が省庁をこえて集まり、熱心な勉強の場になっていた。彼女は手際よく昼食を用意し、みんな美味しくごちそうになった。その頃、私は広告会社をやめて、アメリカでの活動をはじめたファッション・デザイナー森英恵さんの所で仕事をするようになったばかりで、中東に目を向ける人たちをまぶしくみつめたものだった。

70年代の初頭、ニューヨークで逢った。彼女はサウジアラビアの沙漠での最初のフィールドワークを終え、ご主人の赴任先で論文をまとめていた。外交官の妻と研究者としてもキャリアのはざまで悩みつつも、「あなた、ファッションを売りにアメリカに来るなんて違うわよ。アラブの女性たちの黒いアバーヤの下は、金銀きらめくパリのオートクチュールよ。アラビアこそ顧客の宝庫よ」と力説して私を面くらわせた。このころから、沙漠が彼女のメインテーマになっていたのだろう。

1988年には、アラブ首長国連邦の日本大使であった片倉邦雄氏のもと「日本文化週間」が企画され、催事の華としてパリ・オートクチュール組合に属する唯一のアジア出

身デザイナー、森英恵のファッション・ショーが、アブダビとドバイで行われた。昼間のショーは女性客だけ、夜は外交官・外国人も招いて開かれたが、最前列はすべてアラブのプリンス達という異色の会場風景だった。最終回のあと、彼女と二人でグラスをあわせた。「30年前、津田のキャンパスですごした日々には、アラビアでこんなことになるとは想像もしなかった。人生っておもしろいね」と。

2012年秋、久しぶりに出かけた母校のホームカミングデイで声をかけられた。「吹田さんですよ。片倉もとこさんが少しお具合のわるいことご存知ですか・・・？」と。驚いて芦花公園の自宅を訪ねた。「天国の玄関がみえてきた気がするの」と言う彼女に、言葉がなかった。ほどなく末期癌を告げられた。それでも、12月6日には、共立女子大学で「イスラーム世界の女性」と題する講演をおえた。2時間余、立ちっぱなしで、時には聴衆を笑わせながら…。それから自宅での終末のときを迎えるまで三か月足らずだったが、折りにふれ訪ねては、ポツリ、ポツリ、いろいろな話をした。「あなたが広告の世界から、森英恵さん＝物を創る仕事にかわったのは、ほんとによかった」と言われたのには、驚いた。彼女の思考の源にふれた想いがした。

年がかわってから、アルジェリアで日揮の人質事件が起こり、連日の報道にもとこがどう受けとめるか気が気ではなかった。50年前、彼女がアラブ―イスラーム世界を知ったのは留学先のアメリカで、アルジェリア独立運動の志士に出会ったからだと思うと不思議な気がした。

片倉もとこは旅だっていった。「人生は学ぶことだ。死ぬまで学ぶことだ。」と言いおいて。私も彼女の残したキーワード“沙漠”を学ばなければいけない。ファッションの世界から、見渡すかぎり何もかもない沙漠への旅たちは、マノン・レスコーみたいだけれど……。

(文：吹田靖子)



1988年 ドバイにて 片倉ご夫妻と

片倉もとこ沙漠文化財団設立披露パーティー 開催報告

2014年2月21日、東京六本木にある国際文化会館、岩崎小彌太記念ホールに於いて、当財団の設立披露パーティーが開催されました。その内容について報告します。

小春日和のあと再び冷え込み、まさに三寒四温となった2014年2月21日、午後3時より東京六本木にある国際文化会館、岩崎小彌太記念ホールに於いて当財団の設立記念披露パーティーを、104名の出席者をむかえ開催した。

この日に合わせてサウジアラビアより招いた、片倉もとこフィールドワークの最大の協力者アブドゥルラヒーム・アル・アフマディ氏と、その娘であり現在は議員（2013年、国王勅令により選ばれた30名、全体の20%に当たる諮問評議会初の女性議員）の1人として活躍しているハナーン・アル・アフマディ女史、そして彼女の夫であり研究者仲間でもあるタラール・アル・アフマディ氏に加え、駐日サウジアラビア大使夫人も姿を見せ、民族衣装に身を包んだ4名のサウジ人の方々が来賓席に座ると、会場は華やかな雰囲気に包まれた。



スピーチをするハナーン女史

片倉邦雄評議員会議長の挨拶を受けた牛木代表理事は、趣意説明のあと、沙漠を研究の原点としていた片倉もとこの遺志を継ぎ、沙漠文化に関する調査研究や芸術文化活動に取り組む人々を支援する「ゆとろぎ賞」を設けると発表した。第1回受賞者には、日本バイオビレッジ協会の長濱直会長、長濱晴子事務局長が、中国・内モンゴル自治区



（左から）長濱晴子氏、アブドゥルラヒーム・アル・アフマディ氏、長濱直氏、タラール・アル・アフマディ氏、片倉評議員会議長



スピーチをするアブドゥルラヒーム・アル・アフマディ氏（左）と通訳をする片倉評議員会議長（右）

で沙漠化防止活動を続けてきた功績により、生前の片倉もとこの言葉通り選ばれた。

続くサウジから来日したアブドゥルラヒーム氏による来賓挨拶では、長期にわたる調査の間、常に現地を尊重したことに敬意を払うと、その研究態度が氏の朗々とした語り口で称えられた。ハナーン女史は、片倉もとこがサウジアラビアでフィールドワークをしていたころ自分はまだ子供だったが、「アンティー・モトコ」と呼んで慕っていたこと、また、米国留学中に大学の図書館で「ベドウィン・ビレッジ」を発見し夢中で読んだことなど、思い出話を温かく語った。彼女は来日直後、財団設立記念パーティーに先立ち行われた小池百合子国会議員との会談、NHKや朝日新聞の取材の際に、これらのエピソードやサウジにおける女性の立場の向上についても語っている。

パーティーの半ば、アラムコ・アジア・ジャパン製作DVDを財団側でオリジナル編集した映像を流すと、生き生きとした片倉もとこの表情やユーモアあふれる言葉に、場は一斉に熱気を帯びはじめた。さらに、自身が撮影したサ



小池百合子議員（左）とハナーン・アル・アフマディ女史（右）

ウジアラビアの写真を紹介し、最首公司プロモーターを中心に、登壇者として縄田浩志、辻上奈美江、河田尚子、郡司みさおが語り合う形式でスライドショー&パネルディスカッションを進行した。(敬称略)

評議員、吹田靖子による閉会の辞のあと、懇親会においてはアラブ古典音楽トリオ「しんきちさん」による軽快な音楽演奏が華を添えた。

その後、次のような声が寄せられている。「もところ先生のお人柄が出ていて、大変良い会でした」「設立の経緯や財団の意義が良くわかりました」「文化的にも貴重な写真を見ることができ、感動しました」

財団にとって、これは初めの一步にすぎないが、片倉もところの遺志を継ぐ確かなものとなった。



アラブ古典音楽トリオ「しんきちさん」による演奏

(文：郡司みさお)

ゆとろぎ賞受賞者のことば

《ゆとろぎ》の気持ちでこれからも

日本バイオビレッジ協会 会長 長濱 直・事務局長 長濱 晴子

アラビア語に「ラーハ」という言葉があります。これは、「ゆとり」や「くつろぎ」を意味しているのですが、片倉もところはこれを「ゆとろぎ」と訳していました。「ゆとり」に「くつろぎ」をたして「りくつ」をぬく、つまり「ゆとろぎ」です。理屈を抜きにして沙漠の生を慈しんでいた彼女らしい造語です。

当財団は、沙漠を研究の原点としていた片倉もところが愛した言葉「ゆとろぎ」を冠した賞を設けました。本賞は、沙漠文化に関するさまざまな研究、教育、文化、社会活動など、これまで我が国に十分に知られていない沙漠文化を対象とし、ひろく社会への諒解に寄与した活動に対して贈られるものです。

第1回「ゆとろぎ賞」受賞者には、片倉もところの遺志により、中国・内モンゴル自治区で沙漠化防止活動を続けてきた功績により、日本バイオビレッジ協会の長濱直会長、長濱晴子事務局長が選ばれました。

第一回ゆとろぎ賞の受賞は、片倉もところ先生のご遺言と
思い、誠にありがたく拝受させていただきました。私たち
にとって生涯の宝、何事にも代え難い大きな財産です。

もところ先生とのお付き合いは20余年という短いものでは、
人生の重要な時期に、いつもお心のこもったお声をかけて
いただき励まし支え続けて下さいましたので、もところ先生
との出会いに加えて、このたびの受賞はさらに有形無形の
恩恵を強く感じています。

もところ先生に初めてお目にかかったのは、1990年5
月の日本沙漠学会の設立総会でした。同年8月に参加
したカーズ灌漑国際学術討論会(開催地：新疆ウイ
グル自治区ウルムチ)では、身近で先生のお人柄に接



ゆとろぎ賞授与式。受賞した長濱直氏(左)と賞を授与する牛木代表理事(右)

《ゆとろぎ》の気持ちでこれからも

し、いろいろとお話が出来ました。この時の印象深い出来事の一つは、今も鮮明に脳裏に焼き付き、もともと先生を考える原点になっています。

一つは、ちょうどその時イラクのクウェート侵攻があり、情報が全く入らず不安の日々で、駐イラク片倉邦雄大使の安否を心配されておられました。しかし究極の不安の中にあっても、何となく神に身を任せておられるような、ゆったり感があって、それはどこから来るのだろうか、と私は不思議に思っていました。やっと北京に戻って連絡が取れ、安堵された笑顔は忘れられません。

今思うと、イスラーム文化の探求者だからではないか、それが《ゆとろぎ》や《諒解》につながっていると実感できるのです。この二つの言葉は、私たちが中国で沙漠化防治活動が続けていくのに、本当に大きな励みとなり支えとなっています。良い時ばかりではなく、なかなかうまくいかない方が多いわけですから、こうした心が折れるような時には、私たちの心を和らげ、元に戻してくれます。さらに「休む元気」も加わりました。振り返ってみると、もともと先生が20年以上にわたりずっと温かく見守ってくださったお蔭で、くじけずに活動を継続できたと感謝しています。

二つは、当時の私は、石川島播磨重工業(株)のエンジニアでしたが、「近い将来に退職して、第二の人生を沙漠化防治にかけるつもり」とお話すると、もともと先生は目を丸くして「嬉しいわねえ。そういう熱意のある人は大歓迎よ」とおっしゃいました。このお言葉は、その場限りの美辞麗句ではなく、私が一年半後に50歳で自主退職して日本沙漠学会初代事務局長になった6年間からのことを振り返ると、先生の一つ一つのお言葉と行動に、一貫した力強い協力者・応援者の姿が感じられるのです。①私が報告する、会員数を倍増したこと、学会誌が文部省の補助金が受けられたこと、賛助会員を増やしたことに対して、「学会の基礎を築いた事務局長の努力を高く評価する」と。②翌年に晴子が難病(重症筋無力症)を患った時には「ボランティアでは大変だから、少しでも給料をあげるべき」と。③98年に学会を退会して内モンゴルで沙漠化防治事業に専念してからも、毎年の報告書に対して直筆でお手紙やおはがきを下さいました。④晴子も退職して私の活動を応援するようになってからは、私たち二人の活動として応援を下さいました。元ナースの晴子は、沙漠化防治活動に門外漢と思われるかもしれませんが「沙漠化防治は地球を癒すこと、看護は人を癒すこと、看護も沙漠化防治も同じ」という看護の視点を大切に考える方で、この考えにも温かい共感を寄せて下さいました。⑤『日中環境教育実践普及センター10年のあゆみ』(A4判352頁、2011年)



長濱直氏(左)、長濱晴子氏(右)と牛木代表理事(中央)財団事務所にて
設立披露パーティでのサウジアラビアからのゲスト正装から着想された、白・黒・金の包装紙をリサイクルして1羽ずつ折られた「折鶴アート」を、ご恵贈いただきました。

を長年のご支援に感謝を込めてお送りしましたところ「よく頑張ったわね。いい仕事をなさっているのね、素晴らしい業績よ!」と。

最後に直接お目にかかったのは、我が家の近くの文京学院大学での講演会(2010年10月30日:イスラームとは何か)でしたが、その後もお電話、お手紙やメールでの交流が続いていましたので、『旅だちの記』(2013年4月)を手にした時は、本当に驚き信じられませんでした。しかし、今でもどこかでフィールドワークを続けておられるお元気なお姿が目に見え、爽やかなお声が聞こえてくる気がしています。

そろそろ中国の活動も終わりにしようかな、という気持ちがあっただけに、今回の受賞は、強くて大きな喝を入れられたと思いました。「日本と中国と国同士がギクシャクしても、私たちは友達だ」と言ってくれる現地の大勢の隣人がいる限り、また体力の続く限り、《ゆとろぎ》の精神で、無理をせず、楽しんで活動を継続したいと、気持ちを新たにしています。誠にありがとうございました。

片倉もともと記念沙漠文化財団のご発展を心よりお祈り申し上げます。

日本バイオリッジ協会

長濱 直・長濱 晴子

〒113-0001 東京都文京区白山 1-33-8-1003

財団披露パーティーへお招きしたアブドゥルラヒーム・アル・アフマディ氏がサウジアラビアへ御帰国後、地元新聞社から当財団についてインタビューを受けた際の記事を大意要約して掲載いたします。

片倉もとこ と 沙漠文化

(アル・リヤド紙 2014年2月27日)

アブドゥルラヒーム・アル・アフマディ／片倉邦雄 訳

WEB 記事サイト <http://www.alriyadh.com/91357>

これより何年も前に、日本の女性、片倉もとこ教授は我が国滞在の2年間に、ブシュール村を事例として遊牧民村落の経済成長の姿を研究した。ブシュール村民は涸谷ワーディ・ファータマとアスファーン間のシャーミヤ地方に居住し、牧畜と農耕を生業とし、児童に対する教育熱心な地域として知られ、またジェッダと聖地メッカに近いという地の利もあり、住民の努力の成果によってワーディのダフ・ゼイニは中継物流センターとなった。学校や水源や牧草地は近く、住民は農民、商人、自営業者や公務員としてそれぞれ場所をえて生活していた。この過渡期はサウジ王国が社会的にも経済的にも飛躍の変化を遂げた時期であり、片倉教授が博士論文取得のため現地調査を行ったのはちょうどその時期に当たり、研究成果はこの分野の研究者、専門家にとって重要な参考文献となった。そして同教授はその後、学術調査や公式ミッションなどの機会に反復してサウジを訪れ、この調査をフォローアップしている。

今回のイベントはもとこ先生の他界後、その遺志に基づいて設立された沙漠文化財団の発足の機会に催されたもので、

私ども生前のもとこ先生を知る者にとってはつらい気持ちを隠すことはできないが、その反面、先週、既に構築されたサウジ・日本二国間の友好のチャネルを一層強化するために行われたサルマン皇太子兼副首相の訪日がこのイベントと重なり、東京の街頭に両国旗が華やかに掲げられたことは誠に喜ばしいことだった。

・・・全く沙漠のない社会(日本)から沙漠文化に向けられた関心というものは誠に奇特新な視点といえることができる。しかし、もとこ先生が現地調査の間に感得した沙漠社会の価値、人々の行動、独自性、あらゆる側面での学習意欲が、物心両面に彼女を沙漠文化調査・研究へと駆り立てた。そしてこの新設された日本の財団と研究者はこの方向の強化を物心両面から支援する体制にある。このイベントに150人を超える研究者、支援者が集まったことが何よりの証左である。

この会議に参加して感じたことは、他国の人々がここまで惚れ込んでいた沙漠に我々が一体何をやっていけるのか？この物質的精神的な宝物に敬意を払い、その救済を訴えるべきなのではないかということだ。

サウジアラビア社会の文化に関心を注ぐ日本の財団発足

(アル・ハヤート紙 2014年2月27日)

アブドゥルラヒーム・アル・アフマディ／片倉邦雄 訳

WEB 記事サイト <http://alhayat.com/Articles/785503/>

アブドゥルラヒーム・アル・アフマディ氏は、1960年代後半にワーディ・ファータマ(サウジ西部)の遊牧民社会にはいりこみ、人々の信頼と親愛を勝ちつつ現地調査を進め、この社会の文化遺産を観察した結果を綿密な学術論文として発表した日本人女性研究者片倉もとこの懸命な努力と粘り強さに言及し、文化人類学上の科学的価値と挑戦を確証している。

アフマディ氏は研究者もこの科学的調査遂行を支援するうえで目覚ましい役割を果たし、この貢献を評価され、「Bedouin Village」の題名で調査結果が出版されるに当たっては依頼を受けてそのアラビア語版に序文を書いている。

片倉教授は、沙漠は研究の主軸であり、実際の沙漠文化は尊敬に値するという最後の言葉を著書に残してこの世を去った。だからこそ、沙漠文化に係わる基礎研究と独創的な業績のために遺産を「片倉もとこ記念沙漠文化財団」に投資することを遺言した。

その遺志を実現する財団が設立し、アフマディ氏は、令嬢

でマジュリス・ル・ショウラ(国会)議員のハナーン・アル・アフマディ博士とともに、この財団の発足記念行事に出席した。アフマディ博士はこの機会に、サウジ代表として以下のように発言した。

「我々は王国において自分の文化、文明遺産とわがイスラームの価値を尊重し、だからこそワーディ・ファータマ社会がまだ現代生活のあらゆる利便からかけ離れた伝統的生活を営んでいた段階に片倉教授の文化人類学的調査研究を認め歓迎してきたのである。また片倉教授はサウジ社会の伝統と文化を大いに尊敬し、日本人女性として遊牧社会の家族の価値、両性の伝統的な役割をよく理解することができ、広い心でちがいを楽しむ余裕もあり、他方サウジ社会と日本社会との間の共通分母も見出した。その結果、彼女は研究者としてゆるぎなき尊敬を勝ち得た。片倉もとこ教授はこうしてサウジ王国の中で重要な地域にある遊牧民社会の特性を、信用状を得て検証し、歴史上決定的段階にあった王国における社会生活の変化を観察することができたのである」

公開シンポジウム

「片倉もとこ先生をフィールドワークする」報告

2014年3月29日（土）、大阪府吹田市の国立民族学博物館において、同博物館・国際日本文化研究センター・比較文明学会関西支部共催の公開シンポジウム「片倉もとこ先生をフィールドワークする」が開催された。

プログラムは、国立民族学博物館・西尾哲夫教授「イスラームの世界観—アラビアンナイトから考える」、比較文明学会関西支部副支部長で京都市立芸術大学の龍村あや子教授「イスラームの音文化」の2つの講演のあと、「イスラームの女性たちは今」「出会いとフィールドワーク」の2つのパネルが、片倉もとこ先生との親交の深い研究者らによっておこなわれた。

「イスラームの女性たちは今」においては、東京国際大学名誉教授・宮治美江子、桜美林大学教授・鷹木恵子、同志社大学教授・中西久枝の各氏により、片倉もとこが長年追ってきたイスラーム世界の女性たち（ムスリマ）の現状が紹介されるとともに、ステレオタイプな姿で描かれがちだったムスリマや、遊牧民の女性のありのままの姿を描きだした片倉もとこの業績がたたえられた。

「出会いとフィールドワーク」では、中央大学教授で本財団理事・清水芳見、国際日本文化研究センター教授・井上章一、国立民族学博物館助教・藤本透子、本財団評議員・吹田靖子が、文化人類学者として、国際日本文化研究センター所長としての、これまで知られていなかった片倉もとこの姿を紹介した。このパネルに本財団から参加した清水芳見理事は、これまであまり専門家がいなかったヨルダンを調査地を選ぶに至った経緯に片倉もとこの助言が

あったことを明かし、吹田靖子評議員は人生の節目節目、ときにニューヨーク、ときにアラブ首長国連邦で片倉もとここと語り合い、時代を駆抜けた同士の印象的な

エピソードを紹介した。片倉邦雄評議員会議長は最後に、もとこ氏がアラブ・イスラーム異文化環境の最たるサウジアラビアのワーディ・ファアティマを調査地として定め、手がけたフィールドワークの手法として次の5点を挙げて紹介した：①遊牧民の人たちとの信頼感の醸成（情解）②コミュニケーションの手段としての口語アラビア語の駆使③写真やKJメモ等綿密な資料収集④調査村の人々と生活を共にしたこと⑤調査村を反復訪問したこと。

このあと、阪急エキスポパークホテルで懇親会が行われ、大阪大学・千葉泉教授らの演奏で、片倉もとこの造語「ゆとろぎ」にインスパイアされた曲「ゆとろぎの灯」が披露された。懇親会の席上、牛木久雄財団代表理事より、リッチ・コールドー『沙漠と闘う人々』（岩波書店、1952年）の引用とともに、本財団の紹介および支援の呼びかけがおこなわれた。最後にシンポジウム主催者の国立民族学博物館名誉教授・中牧弘允氏から、今後とも財団と協力して「片倉もとこ先生をフィールドワークする」作業を深めていきたいという挨拶をいただいた。（文：河田尚子）



シンポジウムの様子

活動報告

2013年11月7日

片倉もとこ記念沙漠文化財団設立

2014年2月23日

財団設立記念パーティ開催

2014年8月1日

財団WEBページ開設

2014年11月5日

ニュースレター創刊

その他の報告

2014年6月1日

日本沙漠学会の今大会より、沙漠学会賞の副賞として、「片倉もとこ賞」が創設されることとなり、北村義信氏（鳥取大学乾燥地研究センター）、石本雄大氏（鳥取大学農学部生物資源環境学科）に純銀製メダルが授与されました。

季刊アラブへの写真提供について

日本アラブ協会発行『季刊アラブ』2014年春号、夏号の表紙写真として、片倉もとこ撮影写真を提供しました。



編集後記

昨年11月に一般財団法人として発足した「片倉もとこ記念沙漠文化財団」の、ニュースレター第1号をお届けいたします。「沙漠のままの文化を大切にしたい」という、片倉もとこの遺志を受け継ぎ、当財団は、その歩みを始めたばかり。今後、沙漠文化の《諒解》に資するため、努力を重ねてまいります。

皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

片倉もとこ記念沙漠文化財団事務局

〒151-0063

東京都渋谷区富ヶ谷
2-21-1

駒場マンション610号室

TEL: 03-6407-9873

FAX: 03-6407-9090

Mail: office@moko-f.com

Web: http://moko-f.com